本棚ぶらり

『なぎら健壱さんが教えてくれた東京「江戸の橋」散歩』

主婦の友社／編　主婦の友社
2015年

この本は、たくさんの江戸の浮世絵と現代の写真を用いて、東京下町に架かる橋を中心に20の橋を紹介するガイドブックです。その中の一つ、隅田川に架かる永代橋は元禄11（1698）年に将軍綱吉の50歳を祝して架橋されました。しかし文化４（1807）年、祭りに詰めかけた群衆の重みに耐えきれず落下し、千人以上が犠牲となってしまったのです。その後、永代橋は何度か架け替えられますが、大正12（1923）年の関東大震災では避難する多くの人々とともに焼け落ちてしまいました。

現在、「江戸の橋」はどのような姿となっているのでしょうか。橋探索の散歩に出かけ、東京の街に今も残る江戸情緒の名残をぜひ見つけてください。

『中野京子が語る橋をめぐる物語』

中野京子／著
河出書房新社　2014年

あの世とこの世をつないだり、幽霊や化け物たちが出たりと、橋でイメージするものは、どの国や文化であってもおおむね共通しているようです。

革命時に他国へ亡命しようとしていたルイ16世とマリー・アントワネットがその手前で捕まってしまったフランスのヴァレンヌ橋、ゴーゴリの『外套』に登場するロシアのカリンキン橋。そんな歴史や文芸作品に登場するものや、現在も橋からの飛び込みが絶えないサンフランシスコのゴールデンゲートブリッジなど、古今東西の橋にまつわる逸話が紹介されています。

普段、私たちが何気なく渡っている橋にも、驚くような秘話が埋もれているかもしれません。

『日本の橋』

五十畑 弘／著
ミネルヴァ書房　2016年

近代以前、日本の橋は寿命が短かったことをご存じだろうか。

明治初期に来日したスコットランド人技術者の記録に、常に修理が必要で、５年くらいで全体を架け替えなければならないといったものがある。それが、「日本書紀」の中にも現れるほど古くから使用されてきた橋というインフラ設備の寿命であったというのだ。現代では考えられない。日本の橋にどんな変遷があったというのか。

木造から始まる素材の移り変わりに重厚な西欧の構造様式との出会い、そして建設に関わる契約方法の近代化への歩み。橋の歴史が、豊富な用語解説とともに、本書に収まっている。本書を通じて、古今の橋の姿をご覧いただきたい。

『歩道橋の魔術師』

呉明益／著　天野健太郎／訳
白水社　2015年

自分は魔術師だという男が、僕が靴ひもと中敷きを売っている真向かいでマジック道具を売り始めた。はじめこそ、僕も近所の子供たちもマジック道具を買ったが、あらかた買ってしまい、そのうち流行らなくなる。そんなある日の仕事始め、魔術師が取り出したのは真っ黒な紙の小人だった。黒い小人はやがて歩道橋のスターとなっていくが・・・。

舞台は1970～80年代、台北駅周辺に実在した中華商場の歩道橋。台湾初の巨大なショッピングモールで、当時は流行の最先端の場所だった。本書にはそこで魔術師と出会った子供たちの、貧しさを抱えながらもエネルギッシュな生き様を綴った9つの幻想的な物語が収められている。子供たちのように魔術師の見せた幻に飲み込まれてみてはいかがだろうか。